

私たちはビオトープの中で育まれてきた！

企画委員

下谷栄治

10月16日、「春の小川プロジェクト」(川口彰五郎会長)の行事として、「秋の観察会&自然と親しむ会」があり、迂生も参加し勉強させて戴きました。場所は我がカワヨグリーン牧場敷地内で、牧場出入り口の北側に準備中のビオトープです。

近年、保育所でも、幼稚園でも、小学校でも、或いは様々なNPOでも情操教育の一環として、子供達を自然と触れ合わせる活動を進めています。なんと素晴らしいことでしょうか。迂生も臆面もなく及ばずながら春の小川プロジェクトに名を連ねています。

さて、へそ曲がりの迂生が立場も弁えず、これら一連の教育活動を別の角度から見てみると、教育機関等が敢えて組織として取り組まなければ今の子供達は自然と触れあい、理解することが極めて難しい社会環境にあるという事象が見えて来ます。このことは、日常生活環境そのものが豊かな自然に恵まれているおいらせ町に於いても例外ではありません。更に深読みすると、過剰に安全対策が施され、緻密にプログラムが組み、観察や遊びの道具が与えられ、専門家が作成した指導マニュアルに従って自動的に結論に導かれると言う様に、総てがお膳立てされた受け身の教育環境に子供達が閉じ込められているという実態です。換言すれば、超過保護の下に皮肉にも情操教育の目的に反し、子供達の自立・自律の芽を摘む方向での教育活動になっているということです。その上、情操教育の名の下に、自然との係わりを「恩恵」、「保護」、「共生」等をベースにした母性的アプローチに偏向していると言えないでしょうか。

言うまでもなく、地球生態系の一員である我々人類が自然から受ける恩恵に感謝し、それを保護し、それと共生すべきことは当然ですが、一方で自然界は厳しいものであり、醜いものであり、残虐でもあり、危険でもあり、驚異でもあることは疑いのない現実です。地震や津波或いは火山爆発や洪水等と言った自然災害はもとより、他の生物との間で或いは人間同士の間ですら危険や脅威を受ける中で、自己防衛を図りながらも生きんが為に弱肉強食の所行を強いられる場面が多々有ることも避けられない現実です。則ち、子供達には自然の「厳しさ」を体感させる中で、生き抜く術と力を身に付けさせ、自立・自律の精神を培う必要があると考えます。それは所謂父性的アプローチと言えましょう。今時、それが叶わぬ現実であることを重々承知はしていても、何故こうなってしまったのか、これで良いのかと問い直すことも必要なのではないのでしょうか。

善し悪しは別として、私たちの子供の頃は日常生活の場が自然そのものであり、ビオトープであったと言えましょう。回顧主義或いは望郷の念に埋没するつもりはありませんが、世間一般が経済的に厳しかった家庭環境や、スナック菓子も無く、テレビもゲーム機も無い時代背景で子供達は極当たり前に自然界に戯れ、その中で怪我をしたり、時には生物を殺してしまったり、仲間同士の競争や喧嘩で涙を流したりという様に、生身の人間として心身共に痛くて辛い経験を繰り返し、それも幼少期の段階で多くを重ねて来ました。因みにいずれも親や学校等から与えられたものでは無く、子供達が自ら本能的に行動し、自ら

仲間を構成し、自ら遊び方や遊び道具を考え出してのことでした。その結果、自我に目覚め、生き物を慈しむ心、自然に感謝する心或いは他者を労る心を養い、長幼の序を学び、学問の意義を問い、大人社会を嫌悪・批判し、社会規範を学び、意識することなく人格を築いて来たと言えます。

自然環境は取り戻すことが出来たとしても、そこで子供達をどの様に育てていくかという社会環境（教育環境）の良質化・高度化は、同時併行して取り組んで行くべき重要な課題であると考えます。競争や勝敗を否定するトンチンカンな平等主義や、野外教育活動に於ける事故に就いてそれが例え過失による軽度な事例であっても裁判の場で指導者、管理者側の責任を追及するといった自己責任放棄の社会風潮の中で、事勿れ主義的な片手落ち（※）教育が当たり前になって来ています。何もかもが揃った社会に生まれ育ってきた高度成長期以降の子供達は、大人が周到に用意した生活環境で辛い、痛い思いを経験することなく育ち、横並びを気にする親から買って貰った IT ゲーム機にかじりつき、テレビの向こう側で華やかな芸能界に憧れ、同様の時代背景で育ってきたその親自身も子供達以上にその世界に自分たちの立ち位置を追い求める風潮が有るようです。

これらの付けは、他の要因も相俟って至る所で吹き出てきています。例えば引きこもり、ペットの飼育放棄、動物虐待、家庭内暴力、子の親殺し、親の子殺し、無差別殺人、親の子供虐待、鬱憤晴らしの連続放火等々枚挙に暇がありません。

いざ大人の入り口に差し掛かった時は既に遅く、それまでに為されて来た社会性を培うべき教育に欠落した部分があったこと、自身が相対的に未熟であること、故に現実の生々しい人間社会に適応出来るまでに至っていないことに親子共々ハタと気付きます。しかしその現実に向つ向きから取り組むのではなく、過ちから目を背け、親もその過ちを取り繕うことに心が動き、安易な逃げに走ることになりがちです。例えば九九の掛け算も出来なくアルファベットも書けないのに形だけの大学生になったり、例えば母国語である日本語すら覚束ないのに海外語学留学と称して実生活現場（実像の社会）である日本から逃げだし（そこでも親が総てを段取りし丸抱えの支援を受けるという過去の過ちを再び犯してまで）、例えばフリーターと称して責任ある労働を忌避し、例えば web 上の出会い系サイトで婚活する等、如何にも虚像の世界で自分探しに腐心しています。この様に非現実的社會（虚像の社会）でしか自我を見出すことが出来ず、自立・自律出来ない大人が次から次へと生産され続けている実態があります。

大衆迎合の極みであるマスメディアとノイジー・マイノリティーとが増長、流布している似非の民主主義、平等主義、平和主義、安全主義或いは似非の性善説、友愛論、人格尊重論、個性尊重論等を見抜き、それらを払拭し、改めて子供達に対する真の自然との触れあい活動のあり方に組み直していくことに喜びと幸せを求める良識あるサイレント・マジョリティーの一人でありたいと思います。就中、母性的アプローチと共に、父性的アプローチをしっかりとバランスさせて行くことを念頭に置いて。

（※片手落ち：差別用語として NHK では使用を禁止されている単語ですが、その使用禁止の判断自体がノイジー・マイノリティーに迎合・屈服した自虐的日本文化否定の行為であると私は思っていますので敢えて使わせて戴きます）